

もっと知りたい!!

FILE 07

病院のこと・先生のこと。

にしかわクリニック

小児科
アレルギー科
呼吸器内科



〒765-0033 香川県善通寺市木徳町 1073-6
TEL 0877-63-6500
URL <http://www.kirakira.ne.jp/~nswclnc/>



にしかわクリニック
院長
西川 清 先生

病院のココが自慢!

- ① 待合ギャラリー
- ② 手作りおみやげ

患者さんと接する時に大切にしていることは?

笑顔にさせる

医師になろうと思ったきっかけは?

姉の病気 子どもが好き

もし、医師になっていなかったら?

お百姓

先生が実施している健康法は?

朝の散歩

当院に期待すること

- ・国内有数の信頼される病院に
- ・何でも診てくれる病院に

どっち?

犬派

猫派

朝食は

和食

洋食

休日は

インドア派

アウトドア派

好きなもの(こと) Best3!

- 釣り
- サクソ演奏
- 折紙・ゴルフ・家庭菜園・マジック・けん玉

フリースペース

23年間香川小児病院に。開業27年。もう高齢になりましたが、子どもの笑顔に元気をもらい頑張っています。市の障害児施設、要保護児、香川小児病院退職者会のお世話をしています。



独立行政法人 国立病院機構

四国こどもとおとなの医療センター

〒765-8507 善通寺市仙遊町 2-1-1 TEL 0877-62-1000
<https://shikoku-mc.hosp.go.jp>
交通機関 ▼善通寺I.Cより車で5分
▼JR土讃線善通寺駅下車徒歩25分

四国こどもとおとな



私とホスピタルアート

四国こどもとおとなの医療センター 院長 前田和寿

私が幼少の頃、急病で病院を受診すると、狭い廊下、薄暗い廊下、病院中に漂う消毒液の匂いがしていたことを今でも鮮明に覚えている。子どもごころに、病院は暗くて怖いところだという印象があった。近年、病院を受診すると、明るくなった廊下とエントランス、消毒薬の匂いもしなくなり、受診しやすくなったが、今ひとつ殺風景な雰囲気だけは否めないが、病院であるのでこんなものかと思っていた。2013年に当院に赴任したときに、ホスピタルアートを初めて見て、病院とは、殺風景であることが当たり前とインプットされていた私は、衝撃を受けた。アートには、全く縁のない私であるが、なんとなく安心でき

る空間であることには違いがなかった。アートディレクターの森合音さんの話によると、完成した作品がアートではなく、患者さん、職員と一緒に作っていきプロセスこそアートだと教えてくれた。現在のトラブルはコミュニケーション不足によるものが多いとは思っている。このホスピタルアートにより、職員ならびに患者さんとのコミュニケーションが活発になることを期待している。

本年度には『癒しと安らぎの環境賞』という名誉ある賞をいただくことができた。今後も、『癒しと安らぎの環境賞』を受賞した病院として、当院のホスピタルアートは、さらに地域に根差したものの、コミュニケーションツールとして発展させていきたい。

マナティ写真展紹介(現在当院エントランスで開催中)

馬場紀子さんから電話があったのは夏のことでした。マナティの写真展を病院で開催できないだろうか。という内容でした。マナティはその風貌や行動にとっても愛嬌があるので病気の子どもたちやお年寄り、誰にでも受け入れられやすい動物だそうです。

病気に向き合っている人々が少しでも喜んでくれたら嬉しい。と紀子さんは言います。ボランティアにも関わらず10月には遠路はるばる京都から同志と2人で搬入に来てくださいました。そして夜遅くまで作業をしてくださいました。そこで私は初めてこのマナティの写真は紀子さんが撮影したものではなく数年前に事故で亡くなった夫の裕さんが撮影したものだとなりました。「友人のように接してくれるマナティ、争わない。平和の象徴。」と、裕さんは紀子さんに言っていたそうです。忙しい仕事の合間をぬってアメリカに通い続けていた。と。紀子さんはそんな裕さんのご意志を受け継いで今回、当院での展示を希望してくださったのです。

マナティの写真の向こうに世界平和を願う裕さんの眼差しが今も生きています。1人でも多くの人に裕さんの思いが伝わりますように。

●写真展紹介

撮影地：アメリカ、フロリダ州
写真の動物：マナティ
地球上で一番優しい動物、マナティ。海や川で水草を食べる暮らしが可愛いマナティは絶滅危惧種です。愛情あふれる母子愛、争わない平和の象徴のようなマナティは、おっとりしたフレンドリーな水中哺乳類です。今回の病院内での写真展のテーマは「癒やし」です。マナティの母子愛、ちょっぴり笑えるしぐさ、生態などをご紹介しています。患者様、関係者の方々に、ほっこり、こころあたたまる時間をお届けできれば幸いです。



●作者紹介 撮影：馬場裕(ばばひろし)

コマーシャルフォトグラファーとして活躍しながら、自分の作品を撮影していました。水中写真を撮る始めてから、野生のアシカの撮影をきっかけに、水中哺乳類に魅了されました。美しい野生のフロリダマナティを「Life Work」と位置付け、亡くなるまで約20年撮影し続けた「マナティ好き」です。マナティ保護の観点から写真集「マナティとぼく～Life with Manatees～」を出版しました。写真集「マナティとぼく～Life with Manatees～」天敵が人間。それでもマナティはひとが友達のように接してきます。マナティの愛らしい姿と彼らを取り巻く環境や問題からの保護を呼びかける写真集です。オンラインショップCreema(クリーマ) (<https://creema.jp/item/16251680/detail>)で販売中。(各書店、オンライン書店でも販売中) インスタグラム (https://instagram.com/bmana_4ever) でいるんなマナティを紹介中です。チェックしてね!



Instagram



小児循環器内科

より良い小児循環器診療を目指し
ワンチームで診療に当たっています

四国こどもとおとなの医療センター

成育循環器診療部長
小児循環器内科医長 大西 達也

地域の先生方におかれましては、いつも患者様をご紹介頂き大変感謝しております。心より御礼申し上げます。

小児循環器内科のスタッフは5名で、小児循環器専門医、超音波専門医、心エコー図専門医、胎児心エコー図認証医、小児心臓カテーテル治療医が診療に携わっています。

当科では主に先天性心疾患の患者様が対象となります。軽症から重症まで様々な先天性心疾患がありますが、特に重症例では、胎児エコーによる出生前診断から出生後の緊急カテーテル治療を含めた周術期管理、手術に際しては小児心臓血管外科との術式検討、そして術後の外来フォローと定期的なカテーテル評価を担当しています。心雑音などで先生方から紹介される場合は超音波診断、心臓カテーテル検査による手術適応診断を実施しています。加えて、重症不整脈の診断治療、重症川崎病の血漿交換療法、急性心筋炎や心筋症に対する人工心肺管理を含めた集中治療、成人期先天性心疾患患者様の遠隔期心不全治療や不整脈管理も担当しております。対象疾患は多岐にわたり、対象年齢も新生児から成人まで幅広く、香川県全域、高知県のほぼ全域、愛媛県東部、徳島県西部から患者様をご紹介頂いています。24時間365日緊急カテーテル治療にも対応できる体制を構築していますので、近隣の先生方におかれまし

ては小児心疾患について気になる患者様がおられる際はいつでも気軽にご相談ください、迅速に対応致します。

また、当科では小児カテーテル治療の幅を広げられるよう努めております。外科手術で治療していた心房中隔欠損症や動脈管開存症に対するカテーテル治療は資格継続のうえ治療しておりますが、2024年度からは小児不整脈に対するカテーテルアブレーションを新たに導入しました。今はまだ限定された症例での実施にとどまりますが、これまで県外へ紹介していた患者様が当院で治療を完結できるようになったことは、「地域に根ざした病院」という病院理念を推進できているものと自負しております。

これからもより良い小児循環器診療を提供できるようワンチームで努めて参りますので、変わらぬご支援のほど宜しくお願い申し上げます。



これからの病院のカタチ 生きるホスピタルアート

— Healing Garden Project —

四国こどもとおとなの医療センター
ホスピタルアートディレクター 森 合音
院長 前田 和寿

四国こどもとおとなの医療センターでは開院以来10年にわたってホスピタルアートを導入してきました。当院で育ててきたホスピタルアート、それは患者さんも医療スタッフも地域住民もクリエイターも輪になって、手を取り合って関わる全員参加型の「病院づくり」のことです。つまり、ホスピタルアートが意味するのは特定の「作品」のことではなくみんなで取り組む「より良い病院づくり」という「こと」であり「過程」なのです。当院で作品が生まれる時、そこにははじめに「痛み」があります。病院は多くの「痛み」が存在する場所だからこそ、常に「痛み」に寄り添い改善していくための「想像力、創造力」が必要です。当院ではかつて「痛み」のあった場所にそっと手をあてるように、その改善の証として、ホスピタルアートが息づいています。

ホスピタルアートは常に院内の医療スタッフと共に実践してきましたが、もう一つの大切な担い手は院外の「虹色アートボランティアメンバー」です。全国各地から集まった200名を超える登録メンバーは、それぞれ自分が楽しいと思うアート活動を通じて常時「より良い病院づくり」を手伝ってくれています。植物を育てることが好きな人、絵を描くことが好きな人、ピアノ、バイオリン、フルート演奏、折り紙、手芸、書道、陶芸、それぞれの特技を活かして共に思いやりあふれる環境を作り、病と向き合う患者さんに「小さな安らぎの時間」「居場所」を提供してくれています。自分が楽しいと思えることで患者さんが喜んでくれる。メンバーにとってこんなに嬉しい事はありません。患者さんへ届けた思いやりはいつしか「感動」や「感謝」に姿を変えメンバーのところに届きます。その思いは循環してふくらみ、やがてメンバーの生きがいになり、自分らしく生きるための命の支えにもなっています。

2025年1月、これまでの院内6階にある屋上庭園での活動や、4階ボランティア室を中心に活動してきたこれらの取り組みを、地域へと広げる「Healing Garden Project」がスタートします。地上庭園とレストランを改善し、地域の人に開放して、病院をより多くの人にとって心地よい「居場所」にしようという取り組みです。当院のガーデンとレストランは建物の外にあるため、病気でも、病気でなくても、障害があっても、なくても、全ての人に開かれていて、いつでも来ていただくことが出来ます。

また、本プロジェクトは今後、普通寺市、総本山普通寺、普通寺駐屯地、普通寺商工会議所と当院の5者が連携し進めてまいります。広く市民のご理解とご協力を得つつ共に庭園を育て

てまいります。

ここ普通寺市は「世界中のすべての人が幸せになるまで自分の仕事は終わらない」と語った弘法大師空海の生誕の地です。1250年を経た今も、心の病を抱えた人が、世界中から救いを求めて訪れる巡礼の地です。この心の救済の地に息づいた当院の前身は、日本を愛し、誰よりも世界の平和を願った乃木希典率いる陸軍11師団の陸軍病院です。当院の地上庭園にある最も古い石碑は日露戦争の時のものです。その石碑には漢文で「戦時中といえども、人の心の癒しはとても大切である。病院の職員が資金を集めて病院とは別に棟娯楽施設を建設した」という内容が記されています。また、総本山普通寺で保管されている古い写真には本堂の中で歌舞伎が上演されている様子、白い服を着たたくさんの傷痍軍人が楽しんでいる様子が写っています。ホスピタルアートは決して海外から導入した新しい取り組みではなく、様々な時代に、医療現場の切実な祈りとして表現されてきたものなのです。

命の救済、世界平和のために命をかけた彼らは、未だ戦火の絶えない世界の現状、人が人を傷つけ、奪い合う様子を見てどう思うでしょうか。

人の痛みに寄り添い続けてきた歴史を持つ、私たちだからこそできることがあります。今、私たちは医療、文化芸術、宗教、政治、経済、気づかないうちに人間が作ってきた様々な境界を超えて、フラットに結びつき、力を合わせて人々の心と体の救済を願っています。誰もが心に痛みを抱える今だからこそ見えてくる美しい未来があります。ここ普通寺から全員参加で誰も見たことのないHealing Gardenを作りましょう。私たちは「痛み」の最中にあっても、いえ、「痛み」の最中にあるからこそ、共に美しい未来を描くことができます。私たちは心を込めてみんなで育てるこの庭が多くの人々の「心の拠り所」になり、「希望」になると信じています。かつてこの地に生きた先人たちが、水不足という「痛み」を通じて、後世を生きる私たちに遺してくれた美しいギフト、「まんのう池」のように。

Healing Garden Projectは「もの」ではありません。共に力を合わせてより良い「これからの病院のカタチ」を模索する「こと」であり、世界平和へのささやかで確かな私たちの表明であり、祈りです。私たちの仲間になってください。あなたのご参加をお待ちしています。

